服飾文化学会誌〈作品編〉　Vol.6　No.1　67～73（2013）

イヴ・サンローランによるオートクチュール仕立ての舞台衣装に関する研究
―越路吹雪着用のイヴニングドレス―

大　楠　寛　子・伊　藤　由美子

Study of an Yves Saint Laurent Haute Couture Stage Costume
— An evening dress worn by Koshiji Fubuki —

Hiroko Ohashi・Yumiko Ito

Abstract

Our purpose was to clarify the sewing techniques and structural characteristics for haute couture stage costumes using a Koshiji Fubuki evening dress in the Bunka Gakuen Costume Museum.

For the method, the pattern which was extracted from actual measurements and draping, was verified by construction of a three-dimensional form using toile and material similar to the original; concerning data, information on structure, sewing and decoration techniques was collected using photographs of the details and a replica of the original dress was produced.

The results produced a noticeable difference between the left and right sides conformed to Ms. Kosiji's figure. Seam allowance width for the maintenance of silhouette and design, underlining and heavy padding were also utilized. Special characteristics for stage costumes, such as the difference in embroidered bead spacing and use of two types of shoulder strap fasteners, were seen. We hope the research data attained through this research can be expanded and our study continued.

Key Words：オートクチュール（haute couture）／舞台衣装（stage costume）／
パターン・縫製技法（sewing technique）／
レプリカドレス製作（replica production of dress）

1．緒言

イヴ・サンローラン（1936年～2008年）は，フランスファッション界において2002年の引退まで，40年にわたり活躍したデザイナーである[注1)]．彼は，ブランド「ディオール」のチーフデザイナー当時の1959年から舞台衣装デザインをしている．また，彼自身のオートクチュール，プレタポルテのコレクションを手掛ける傍ら，1980年までの22年間舞台衣装のデザイン活動[注2)]を行っている．文化学園服飾博物館では，彼がデザインし，メゾン「YVES SAINT LAURENT」で作られた舞台衣装を所蔵している．それは，シャンソン歌手，舞台女優の越路吹雪本人がホテルディナーショー（1970年代）で着用したとされるイヴニングドレス（図1）である．そこでイヴ・サンローランがデ

図1　調査資料のイヴニングドレス
（文化学園服飾博物館所蔵）

文化学園大学

ザインしたオートクチュール仕立ての舞台衣装におけるパターンおよび縫製方法の特徴を明らかにし，詳細な解説を残すことを目的とする．希少な資料であるため解体することはできないが，細密な計測，細部の拡大写真撮影，布製手袋の装着による触感，布地見本との検討を踏まえ，レプリカドレス製作を試みる．

2．意図

本研究のレプリカ製作は，合理性を追求した縫製法の既製服とは異なるオートクチュールで継承されているパターン，縫製方法について調査および試作過程から考察を行うことで，服装造形学における教育資料にしたいと考える．

3．資料調査とレプリカドレス製作過程

3－1調査資料について

図1に示す本研究の資料のイヴニングドレスは，上半身はベアトップで，大きく背中が開いており着用の際支えになる肩紐は，背中でクロスされている．スカート部分のシルエットは，裾に向かって緩やかに広がっている．アンダーバスト位置で横切り替えがあり，その上部の胸元は，上下に寄せられたタックが17本あり，その布の重なりによる立体感で胸元を豊かな表情にみせるのと同時に，ウエストの細さを際立たせている．前からつながる背面のカッティングラインは，シャープな印象を受ける．

3－2　布地の調査とレプリカ用素材の選定

表地と裏地は，布地見本を資料に合わせて視覚，触感から検証を行う．結果，素材および織り組織の類似する40匁ダブルクレープ（表地），デシン（裏地）を選定する．その諸元を表1に示す[注3)]．資料は，裏布が表布の裾にまつられていたことで，内部の状態を目視できない総裏仕立てである．そのため，副資材は，素材見本との視覚と触感で照らし合わせて判断し，裏打ち布地に綿ファイムラン，裾芯に麻シャンブレー，装飾ビーズに長さ0.5cmと0.2cmの竹ビーズ，胸下部分の芯は4.5cm幅ベルト芯とする．

表1　レプリカ使用布地の諸元

布地名	材質（%）	組織	糸密度（本/cm）		厚さ（cm）
			たて	よこ	
40匁ダブルクレープ	絹（100%）	平織り	105	55	0.051
デシン	絹（100%）	平織り	121	54	0.02

3－3　パターンの採取

パターン採取のための資料計測は，資料保持のため平置きの状態で行う．使用計測器は，テープメジャーと竹製定規を用いる．計測箇所は，前後中心線・脇線・裾周り・背開き部寸法・胸元切り替え・タック部分の表ひだおよび陰ひだ寸法・あき寸法・肩紐部・裏面側の胸元部および切り替えである．計測結果をもとに仮パターンを作成する．トワル仮縫いを行う（図2）．その仮縫いドレスをボディに着用させ，着用当時の越路本人の体型に近い補正ボディを作成する．今回補正したボディサイズを表2に示す．

さらに，レプリカ製作用表地による仮縫いドレスを作り，補正ボディに着用させ，図1の資料写真と比較検討を行う．

図2　トワル仮縫い

表2　ボディサイズ表　（cm）

	バスト	ウエスト	ヒップ
既製のヌードボディサイズ	84	60	90
今回補正したボディサイズ	85	67	90

胸元のタック部分は，トワル仮縫いと雰囲気に差が見られたため，再度ドレーピング（図3）で組立て直す．

結果，採取した最終パターンは，補正ボディサイズのバスト85cm，ウエスト67cmの文化式上半身原型に重ねたものを示す（図4）．パターンの特徴は，身頃ウエスト付近の脇線に緩やかな絞りが入り，裾の向かって僅かなフレ

図3　タックパターン採取のためのドレーピング

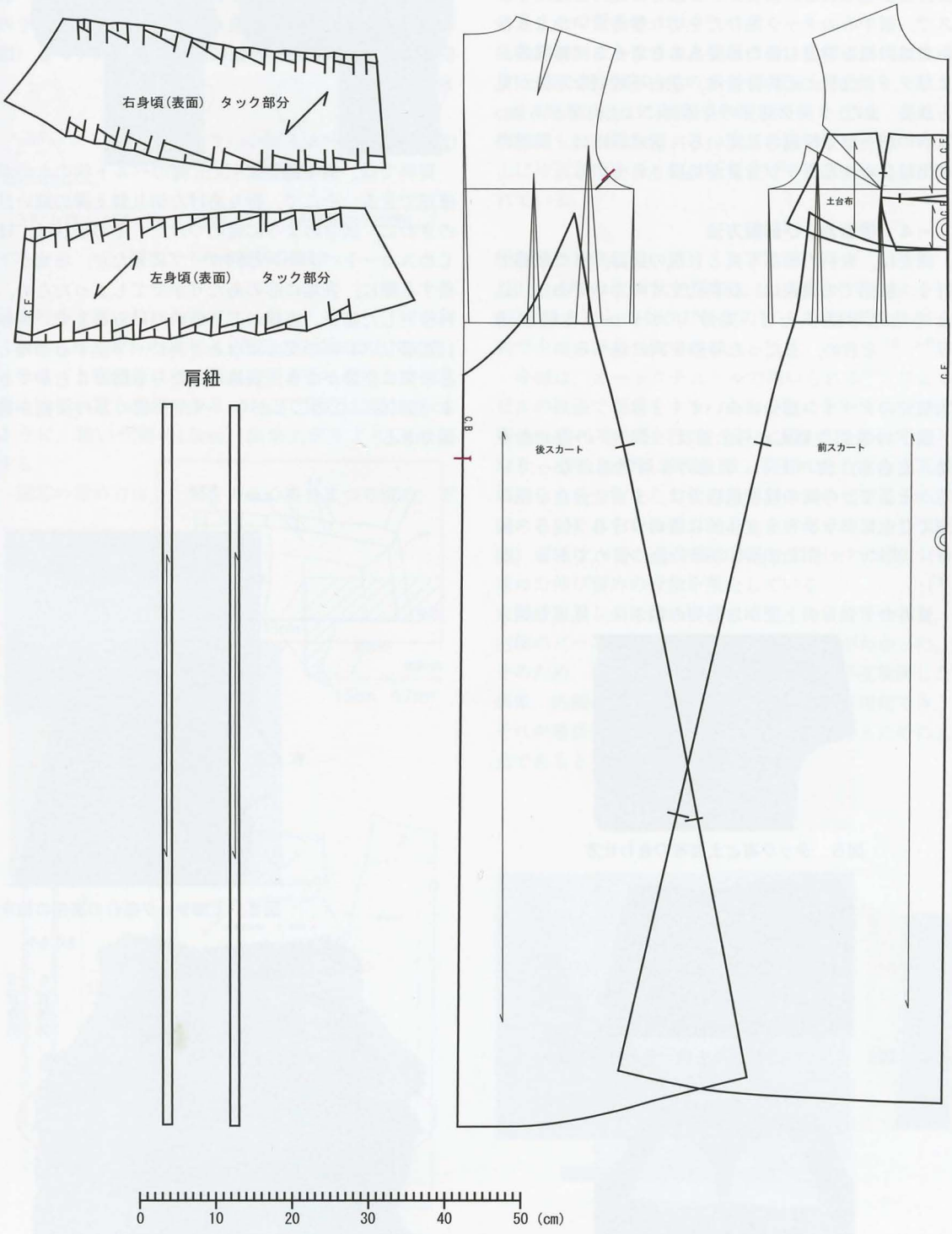


図4　資料から採取した最終パターン

ア分量が見られる．胸元タック部分の地の目はバイアスで，前中心のタック陰ひだを切り替えていたことから布地の幅を考慮したためであると考える．輪郭線およびタック位置とその分量は，左右不規則な形状が見られる．また，タック部分の身体側には土台布があり，４つのパーツで構成されている．構成線には，胸部の突出に合わせたダーツ分量が処理されている．

３－４　構造および縫製方法

調査は，資料の細部写真と目視の記録，また触感で行う．触感での調査は，総裏仕立てのためである．以上の結果を踏まえて，レプリカドレスの縫製過程[注4・5)]を含め，主だった特徴を次に述べる．

①胸元のデザイン部分について

胸下の横切り替えから上部は，タックの寄せた表地，土台布，胸パッド，裏地の４層構造になっている．そこで，今回の縫製過程では，まず土台布を組み立てた上にタック布を立体的に留めつける（図５・図６）．次にパッドは土台布の縫い代に留めてある（図７）．

資料のデコルテ上部から脇側の始末は，見返し始末ではなく，出来上がり線で折り，まつられている．裏地は，表地よりも0.5cm 控えてまつられており，その位置よりさらに0.5cm 内側に星止めがされている（図８）．

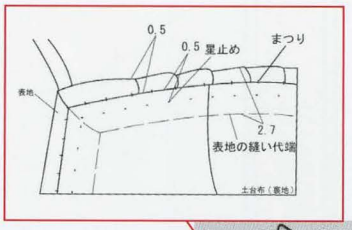
図５　タック布と土台布の合わせ方

図6　タック布と土台布を縫い合わせた裏面

図７　パッド

②胸下部分のベルトについて

資料では，胸下部分に4.5cm 幅のベルト状のものが確認できる．そこで，折りあげた切り替え線の縫い目のきわに，図９のように留めつけた．その形状は，はじめスカートパターンと同カーブにしたが，布地が下垂する際に，表地に芯のあたりがでてしまったため，再検討した結果，直線の芯を留めつけることで，身体に密着しドレスの支えになると共に，下垂する布地と芯の間に空隙ができ，表地のあたりを防ぐことができる（図10）．このことから，ベルト状の芯の役割が推測できる．



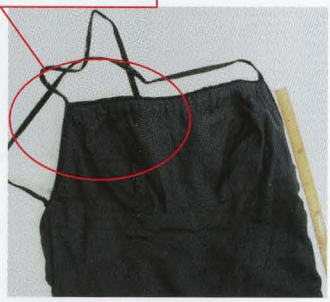


図８　上部タック部分の裏側の始末

図９　胸下部分のベルトの留めつけ

図10　ベルト形状の検討

③裏打ちと縫い代について

裏打ちは，資料のスカート部分の全面にされている．

スカート裾部分には，厚みに差があったことで裾芯が入っていると推測できる．そこで裾芯は図11に示すように，縫い代側に1.5cm，出来上がりより13cmとする．

裾芯の留め方は，上部をゆるく奥をまつり留め，下部を資料と同じように出来上がりより0.7cm縫い代側に星止めで留める．

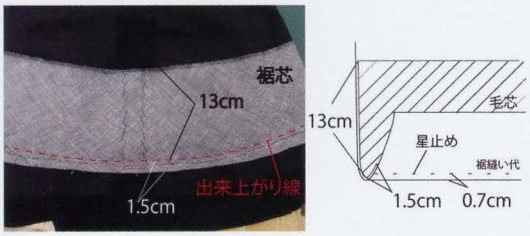


図11　裾芯の据え方

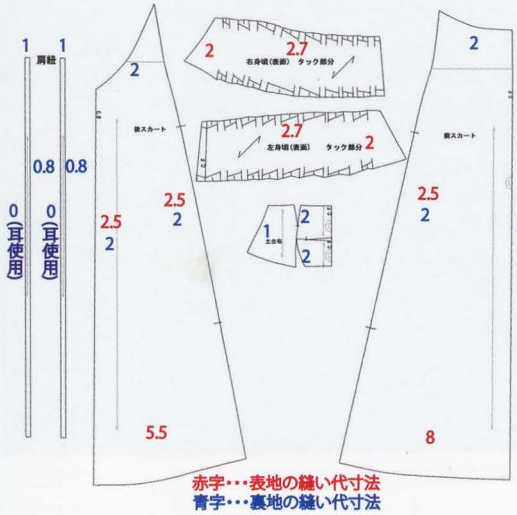


図12　表地と裏地の縫い代寸法

今回判断できた表地と裏地の縫い代幅は，図12に示す．特に裾の縫い代の多さは際立っており，前８cm，後ろ5.5cmである．それらの縫い代は，表地・裏地ともに割られており，胸下の横切り替え線のみが上に片返しである．裾は折り上げて裾芯のみに留められている．

④肩紐の装飾について

0.8cm幅の直線状の肩紐には，図13で示すように0.5cmと0.2cmの長さ２種類のビーズを使用し，計５列で全面に装飾されている．

今回は，オートクチュールで用いられる[注6)]リュネビルの技法で刺繍をする．あらかじめオーガンジーの布地にビーズ刺繍を行い，周りに縫い代をつけて切り取り，出来上がりに折る．次に肩紐の土台となる耳を利用した２つ折りたて地の綿スレキにのせて星止めで留める．それを背面のカッティング部分にまつりつける．肩紐は，この過程を経て強度が増し，デザインを兼ねた伸び留めの役割を果たしている．

肩紐をドレスに留めつけてボディに着装させると，内側のビーズは，押し合って波打つことがわかった．そのため，拡大写真で装飾ビーズ部分を再度検証した結果，内側のビーズ間にはわずかな隙間が確認でき，それが着装時のビーズの並びを美しく見せるための工夫であると考えられる（図13）．

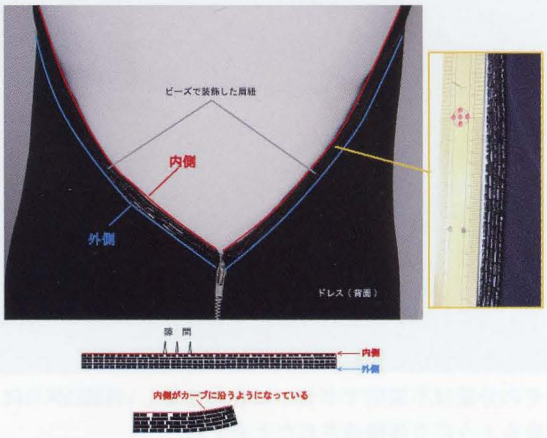


図13　装飾ビーズ拡大図と工夫

⑤肩紐をドレスに留める方法について

図14に示すように，右脇ウエスト部分でマジックテープとかぎホックの２種類の留め具がついている．マジックテープは，かぎホック付け位置を隠すように置かれ，まつられている．マジックテープのフック側が身頃につき，肩紐にはループ側がついている．マジックテープのループ側とフック側の大きさに差が見られるのは，フック側を大きくすることで，着用の際，容易に留められる工夫であり，２種類の留め具を使用することで，外れにくくするためと考える．

図14　肩紐の留め方

３－５　レプリカドレスの着装

完成したレプリカドレスを補正ボディに着装させる(図15)．全体のシルエットは，同じように表現されている．今回の資料は，総裏仕立てのため，触感と素材見本との検討により裏打ち布・裾芯・胸下切り替えにある芯・胸パット等の副資材を決定し使用したが，シルエットが類似したことから，副資材の選定に問題はなかったといえる．しかし，胸下切り替え上部のタックの表情とその膨らみ方に差が見られる．その理由は，当時の布地と同じ条件でないことと，タックを寄せ，留めつける際の手加減の差であると考える．

４．結語

実物資料の調査およびレプリカ製作を通してオートクチュール仕立ての舞台衣装のパターンと構造および縫製技法の興味深い特徴をまとめると以下の通りである．

１．パターンについて

左右対称とした土台に重ねられたタックが取られた部分のパターン輪郭形状は顕著に差が見られた．また，その分量は不規則でボディに合わせ美しい仕上がりに成るように立体構成されたと考える．

２．構造および縫製技法について

胸部分の土台布にタック布を重ねたものと裏地との間にパットのような厚みのある素材があり，その部位の下には，4.5cm 幅の厚手の芯素材があった．また縫い代の幅は，脇線と後ろ中心線の縫い代2.5cm，裾の縫い代幅前８cm・後ろ5.5cm であった．スカート部分の表地の全面には裏打ちの布，その裾には13cm 幅の裾芯が重ねてあった．これらは，シンプルなデザインとロング丈ドレスのシルエットを保持するためと考える．

着脱のための肩紐の留め方は，マジックテープとカギホック２種類が使用されて外れにくい工夫であった．

３．装飾について

肩から後ろ背に繋がる0.8cm 幅の直線状の肩紐は，全面にビーズ刺繍が施されていた．そのビーズ間隔は，内カーブになる方の端列にわずかな隙間があり，着用時にビーズが美しく並ぶ工夫と判断できた．また，大きく斜めに開いた背面とロング丈ドレスを支えるための伸び止めの役割となっていると考えられた．

以上から，現在商品とした価格設定を意識した合理性のあるパターンや縫製方法とは次元の違う，あくまで美しく見せるための服作りの特徴を確認することができた．今後は，調査資料を増やし研究を継続したい．

注

注１）アリス・ローソーン，深井晃子訳，『イヴ・サンローラン　喝采と孤独の間で』，日之出出版，2000

注２）本文執筆ローランス・ベナイム，牧敬子訳，『MODO 1957-1990 イヴ・サンローラン展－モードの革新と栄光』カタログ，セゾン美術館，1990

注３）成瀬信子，『基礎被服材料学』，文化出版局，1985

注４）監修 中屋典子 三吉満智子，『文化学園大学講座　服装造形学　技術編Ⅰ』，文化出版局，2013

注５）監修 中屋典子 三吉満智子，『文化女子大学講座　服装造形学　技術編Ⅲ』，文化女子大学教科書出版部，2001

注６）『Yves Saint Laurent:28 annees de creation』図録，Musee des Arts de la Mode de Paris, 1986

図15　レプリカドレスの着装